

令和元年度 修士論文

切り絵の特徴・技法についての一考察

～切り絵の特徴・技法についてのまとめと

切り絵の認知度調査を踏まえた作品の制作～

教育学研究科学校教育専攻
教科実践コース美術教育領域

18GP310

本間 麻緒

指導教員 石川善朗

目次

はじめに

- (1)研究目的と問題の所在・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- (2)先行研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
- (3)研究方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

第一章 切り絵の発祥 各国の切り絵の文化

- (1)中国の剪紙について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- (2)日本の伊勢型紙について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
- (3)文化としての切り絵がある諸外国の切り絵について・・・・・・・・ 8

第二章 目的の異なる切り絵

- (1)手段として用いられる切り絵・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
- (2)作品としてつくられる切り絵・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

第三章 多角的な視点から見る作品としての切り絵の特徴

- (1)平面と立体の切り絵・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
- (2)素材別での切り絵・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
- (3)道具別に見る手法の特徴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
- (4)紙の場合の使用する枚数について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

第四章 アンケート調査と切り絵作品の制作について

- (1)年代別での認知度を図るアンケート調査・・・・・・・・・・・・・・ 21
- (2)認識されていない切り絵とその制作・・・・・・・・・・・・・・ 23

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30

謝辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

〈参考文献〉

〈図版〉

はじめに

(1)研究目的と問題の所在

切り絵の現状において、技法としての切り絵や作品としての切り絵、使われる素材や道具など「切り絵」という一つの言葉から様々な情報が混濁した状態となっている。切り絵というジャンル、そこで使われる技法は遠い昔から存在するが、アートとして切り絵が注目され、人気が高まり、より一層多くの人に認知してもらおうという動きが活発になったのはここ数年のことだ。

数年前から切り絵が趣味になったという人や、切り絵に興味はないがサブカルチャーなどに関心の高い人に切り絵について聞くと、大多数の人がハサミで切るレース状のものを思い浮かべるのではないだろうか。これは各メディアにて一時取り上げられていた切り絵作家・蒼山日菜¹の作品が影響しているのではないかと考えられる。彼女の作る作品はスイスの切り絵に由来しており、それに伴った特徴が見られる。しかし切り絵の作品としての特徴や技法の在り方は勿論その一つだけではない。また、サブカルチャーに関心がない特に40代以降の方に切り絵について尋ねるとその多くは山下清²の作品、ちぎり絵、貼り絵などを思い浮かべる。果たしてそれは切り絵と呼べるのかというところも踏まえ、年代によって認知に大きな偏りがある可能性が伺える。他にも切り絵について全く何のイメージも抱かないという人もいたが、それは切り絵という言葉に馴染みがないことに起因している場合がほとんどである。というのも、切り絵の技法を用いた商品は多数市場に出回っており、誰も一度は目にしているはずだからだ。つまり視覚情報から切り絵の存在を認知していても、それが切り絵というものであるとは認識できていないのである。

¹1970年12月29日生まれ。横浜市出身の切り絵作家。2000年より、ハサミによる切り絵の制作を始める。当時フランス在住であり、隣国スイスの切り絵に影響を受けていた。細くレースのような切り絵が特徴である。2008年にスイスのシャルメ美術館で開催された第6回トリエンナーレ・ペーパーアート・インターナショナル展覧会にてアジア人初のグランプリを受賞。その他、多くの賞を獲得し、日本に帰国後も様々なメディアにて紹介された。

²1922年3月10日生まれ。東京市浅草区田中町出身。大正に生まれ、戦前・戦後、高度経済成長期の時代を生きた。享年四十九歳。1934年に入園した養護施設「八幡学園」にて、学園教育の一環として行われた「ちぎり絵」により才能が開花し、独自の技法による「貼り絵」へと発展させた。代表作には「長岡の花火」などが挙げられる。

このように、切り絵にはレース状ではないものもあれば、使用する道具がハサミでない場合、素材が紙ではない場合、単色ではない場合、商品として流通されている場合など様々なパターンが存在しているにもかかわらず、その知名度や認識には大きな偏りが感じられる。確かに、分類分けをしようにも「切り絵、且つ貼り絵」「切り絵、且つ折り紙」「切り絵、且つ影絵」など様々なジャンルが融合されている場合が多く、明確な線引きをすることはできない。さらに、切り絵には柔軟性があり、何かを作るための型として存在するものや切り絵本体が作品として存在するものなどがあり、目的によってその完成形態は異なる。

これらの情報の整理の一端として、本稿では作品としての目的を持つ切り絵に重点置く。その上で、とりわけ「平面・立体」「素材」「道具・方法」「紙の場合使用する枚数」に着目し、それらの特徴について整理を行うことを目的としている。

また、世間一般での認知の偏り、切り絵について知られていることとそうではないことを明らかにし、その結果を踏まえ、世間の認知にはなかった切り絵の手法に取り組み、制作をおこなうことで本研究の考察としたい。

(2)先行研究

切り絵についての参考文献は、作家個人の画集や図案集、切り絵を専門に取り扱う美術館や切り絵を取り上げたメディアの記録などが挙げられる。先行研究となる論文として、丹羽朋子著『〈窓花〉から〈剪纸〉へ 中国・陝北農村における女性の主体化の系譜学に向けて』（アジア・アフリカ言語文化研究 No.90,2015）を取り上げ、切り絵の発祥と言われる剪纸に関する研究を参考にした。また、東孝文・金井秀明著『切り絵初心者の上達を目的とする切り絵練習帳の評価』（情報処理学会研究報告 2014）にはデザインナイフを用いた切り絵の詳述がなされており、切り絵の効率的な上達を図る実験に特化したことについて記載されている。これらの参考文献、先行研究は本研究における切り絵の特徴の整理をしていくなかで重要な一端を担っている。しかし、様々な目的や手法で作られる切り絵を特徴別に分類するような内容についてはいずれも記載されていなかった。また、伊勢型紙についても図案書は多くあるものの、手法や現在抱える問題、現状について記載されているものがなく、公式ホームページの閲覧や現地にて関係者に取材するなどして調査にあたった。本研究では文献・論文・取材から特徴に関する情報を集約させ参考としている。

(3)研究方法

まず先行研究で取り上げた論文や集めた情報から、切り絵の発祥、文化としての切り絵がある諸外国の切り絵について概要をまとめる。国内外共に切り絵の発祥は中国の剪紙³であるとする論説をしばしば目にする。中国の伝来ではないというものもあるが、年代を見た際に最も古い切り絵は中国で作られたものであるということには間違いがない。切り絵の発祥となった剪紙についてから触れていき、日本やその他諸外国にてどのように親しまれてきたのかについて調べていく。それらのまとめた内容や、個人作家の作品などを取り上げ、手段としての切り絵と作品としての切り絵という二つの目的に大別する。そして本稿では作品としての目的を持つ切り絵に着目していく。また、本稿における切り絵の定義を「一枚の支持体から切り抜いてつくったもの、またはそれらを組み合わせてつくったもの」とし、その中で、「平面と立体切り絵の捉え方」「素材別での切り絵」「道具別に見る手法の特徴」「紙の場合使用する枚数について」の4つの項目に着眼点を置く。さらに、項目ごとに関連の深い切り絵作家も挙げるなどしながら、その内容の整理をしていく。最後に、アンケートの実施により年代別にして知名度や認知の偏りがどれほどあるのかを明確にしていく。

そしてアンケート結果から明らかになったことを踏まえ、世間一般に認識されていなかった切り絵の手法を用いた制作に取り組んでいく。

第一章 切り絵の発祥 各国の切り絵の文化

(1)中国の剪紙について

一番古い切り絵として中国の剪紙が挙げられる。中国全域に渡って作られてきており、作り手は主に農家婦女であった。

一般に日本や欧米の切り絵は美しさを追求するものが多いのに対し、剪紙は図案によって幸福や豊かさ、子孫繁栄などの意味を込めて作られている。また、中国では「赤」がもっとも縁起のいい色とされていることから剪紙は赤色の紙で作られることがほとんどだ。

³剪紙」は紙をハサミや彫刻刀などで切って、繋げたまま模様を作る中国の民間工芸だ。この剪紙に描かれる題材は、干支・神獣・桃など多種多様である。これらは主に中国で縁起がいいとされているもので、その時々に応じた祈りや願いが込められている。

主に春節⁴の期間に窓やガラスに張る「窓花」、元宵節⁵に灯籠（ランタン）に張る「灯籠花」、というように、おめでたいときの飾り物として使われている。このことから装飾品としての用途として使われていることが伺える。その一方で、剪紙はこれらとは別の側面も持っている。丹羽朋子著『中国・黄土高原の暮らしと切り紙の無形文化遺産化：洞窟の村のエコミュージアム活動をめぐる〈翻訳劇〉の諸相』によると、陝北において剪紙は「女の心の歌」とも言われていたとされている。女性たちが身近な家事の道具である鋏を用いて思いを託し、願いを映し出すメディアともみなされてきたという記載があった。彼女が調査の拠点とした陝北に位置する延川県での女性（6歳以上）の識字率は1990年の統計で44.31%（『中国人口統計年鑑2000』中国統計出版社）とかなり高い数字をだしている。文字を解さない彼女たちは象徴的な図案をも用いながら、愛情表現や家族の幸福祈願を込めて制作し、贈与される靴の中敷きなどの刺繍の型紙にするなどして剪紙を作っているのだそうだ。

このように中国の剪紙は装飾品として作られる一方で、文字を解さない女性たちの願いを伝えるツールや型紙として作られるという二つの面を持ち合わせている。

(2) 日本の伊勢型紙について

日本には、着物の生地を様々な柄に染めるための道具として千有余年の歴史を持つ伊勢型紙という伝統的工芸品（用具）がある。これは染色技法の一つで、伊勢型紙そのものはあくまでも用具としての役割ありきであることから（用具）という表記が付随する。昭和58年4月には、通商産業大臣よりその指定を受けた。

伊勢型紙とは和紙を加工した紙（型地紙）に彫刻刀で着物の紋様や図柄を彫り抜いたものである。使用される道具は彫刻刀であり、その手法は「彫る」というように表現される。現在では趣味で切り絵をしているという方の人気を集めており、伊勢型紙の専門店では切り絵を楽しむツールの一つとして一般の人に図案や道具の販売などもおこなっている。また、現在最も若いとされている伊勢型紙職人の方は伊勢型紙に関する新たな事業を始めている。

⁴中国における旧暦の元旦。旧正月。

⁵春節から数えて15日目の満月の日。旧正月の最後の日。

先に述べた通り、もともと型紙は染色技法の一つで、染めるための道具として作られてきた。しかし、昨今では着物を着る人は減少し、プリント技術が発達したことで安く柄物の衣類が手に入るようになったため、伊勢型紙は消えこそしないが全盛期の頃と比べかなり廃れてしまった⁶と言える。そこで違うアプローチとして、伊勢型紙そのものを商品、作品とする新たな事業展開が始まる。型紙として使用するだけではなく、型紙そのものに価値を見出し、ランプシェードなどの商品化や美術作品として額装などが行われるようになった。染色するための道具として作られていた切り絵状の型紙は時代の流れに応じて切り絵としての魅力を売り出すという別の目的を持つようになってきた。さらに、完成品を商品として販売するだけではなく、需要と供給のバランスが崩れたことで低下してしまった知名度を高めるためワークショップや制作体験などの場も設けられるようになる。簡単な図案の施された型地紙を切るという行為から親しみやすさを抱かせ、興味関心を高めさせることに成功している。関係者⁷によると、切り絵が好きな人が伊勢型紙に切り絵と近いものを感じ、制作体験をしてみたい、伊勢型紙について知りたいというふうに訪れることが多いのだそうだ。ただ、伊勢型紙を消費者として好きになり、関連商品を購入するというファンが増えることが伊勢型紙を存続させる上で最も重要なことであるが、生産者側に興味を抱き職人になりたいという人も少なくない。制作体験に集まる切り絵が好きだという人は、切り絵作品が好きなのは勿論、作ることも好きであるため、伊勢型紙の素材を使った制作体験に興味をもつのである。そうなれば体験した人が生産者として仕事をしたいと思うのは不思議なことではない。しかし、新たな事業展開を始めたといってもやはり職人仕事一本で十分に生活が出来るほど稼ぐことは難しく、職人として育てた後の生活を保証することができないという現状から弟子を取りたがらない職人が大多数だ。現在は職人になることができたとしても、それは身内に職人がいたなど家系からくるものだけだという。また、伊勢型紙にはルールがあり、伊勢型紙協会の会員の手によって作られたもののみが伊勢型紙として認められる。手法が同じ、または伝統的な図案を施していたとしても、会員である職人の手で作られ

⁶江戸時代に入り、伊勢型紙の生産地である白子は紀州藩の天領となり、紀州藩の保護を受けて発展した。この頃、武士の袴(かみしも)に型染が用いられ、その小紋は繊細なものとなっていき、型を彫る職人と染める職人の協同で発展したといわれている。明治に入り、江戸時代に組織された株仲間が解散する。近代の流れを受けて衣服の文化も変わっていき、さらに太平洋戦争で大きな打撃を受けて型紙業者はほとんどいなくなった。終戦後、国内の復興が進むと同時に再び着物の需要が増え、40年代にピークを迎えた。そして現代の新しい技術の普及により、型紙の需要と共に型紙業者は減少し現在に至る。

⁷実際に三重県鈴鹿市白子を訪れ、伊勢型紙の専門店「おおすぎ」の大杉社長、「テラコヤ伊勢型紙」を経営する若手の伊勢型紙職人である木村淳史氏、伊勢型紙資料館のスタッフの方から直接伺った。

たものでなければそれは伊勢型紙と呼ぶことはできないのだ。

伊勢型紙の存続や職人の育成など、課題になる点はまだまだあるが、打開策の一つとして型紙の見方や扱い方の変遷が見受けられた。

(3)文化としての切り絵がある諸外国の切り絵について

まずメキシコの切り絵について触れていく。メキシコでは死者の日や独立記念日などの祭事の際に飾り付けとしてパペルピカドという切り絵がつくられる。パペルピカドとはスペイン語で「穴の開けられた紙」という意味だ。様々な色の紙を使い、万国旗のように糸で繋げた賑やかでカラフルな飾りが特徴に挙げられる。特に11月におこなわれる「死者の日」⁸というお祭りでは骸骨柄のパペルピカドが街中に飾り付けられる。起源は中国の剪紙から来ており、メキシコに移民としてやってきた中国人の手によって1950年頃からつくられ始める。

メキシコでは500年以上前のプレヒスパニック時代⁹からイチジクの樹皮を使った伝統的な紙づくりがおこなわれており、その紙は「アマテ」といって現在でもオトミ族によってつくられているが、パペルピカドに使用されるものはこの紙ではない。パペルピカドには「パペルチノ」という違う種類の薄紙が使用される。アマテにはオトミ族の世界観や宗教館を表した切り絵がされ、それはハサミによってつくられる。

では、何故アマテとパペルピカドは別物として存在しているのか。それはスペイン人の到来から紙の変化があったことに大きな理由がある。スペイン人がアメリカ大陸に到着し、メキシコを征服したことでアマテを含む先住民文化・民芸品の生産や使用が禁止されてしまった。1900年代中期、スペイン人やその血を引く富裕層により、アシエンダという大農園で様々なものの販売が行われた。そこで働く人や近隣住民は必ずアシエンダでものを買うことを強いられ、そこにあったのがパペルピカドに使用される薄紙である。当時メキシコに移民としてやってきた中国人は、春節の度に故郷に思いを馳せ、薄紙を購入し剪紙をつくって飾っていたのだ。パペルピカドに使われる紙は、中国人が使う紙ということで「パペルチノ (Papel Chino=中国の紙)」と呼ばれている。こうした経緯の後、彼らのつくる剪紙が人気となり、お祭りごとに街や建物に飾るパペルピカドとなった。

⁸故人が帰ってくるとされる日。11月1日は子どもの魂が戻り、2日は大人の魂が戻るとされている。祭壇を設け、街を色鮮やかに飾り、盛大に行われるメキシコのお祭り。

⁹中南米において、スペイン侵攻以前の時代。先コロンブス時代とも言われる。

中国の剪紙がハサミやナイフを使うのに対し、パペルピカドは彫刻刀のような「フィエリート」という道具によって手作業でつくられる。作り方の手順としては極力薄い紙を50~100枚ほど重ね、重ねた分を一気に切ってつくる。伊勢型紙もそうであるように、大量生産を目的とした切り絵にはハサミやカッターではなく彫刻刀が使用されるといふ共通点が見受けられる¹⁰。

次にデンマークの切り絵について述べる。デンマークには人魚姫や親指姫、裸の王様など数多くの物語を残したアンデルセンという童話作家がいる。彼は童話作家として知られているが実は切り絵を得意とする側面を持ち合わせていた。彼のつくる切り絵は主に友人や子どもたちを楽しませるためにつくられたものであり、彼の友人・知人の残した記録には必ず切り絵の話が登場する。アンデルセンは童話を語り聞かせると同時に、その童話を象徴する切り絵をつくって周囲の人たちを喜ばせていた。Facebookのデンマーク大使館公式アカウント¹¹によると、その切り絵は童話同様、一見してわかる意味の裏に深い含意が秘められていることが多いそうだ。そのことから表裏一体性を表現しようとする手法は物語と切り絵両方に共通していたと考えられている。このようにしてつくられるアンデルセンの切り絵は様々な手法が用いられている。目にする機会が最も多かったのは折って切ることで開いた時にシンメトリーの切り絵が出来るという手法のものであった。しかし、他にも切ったものを貼り合わせてつくる貼り絵の技法も用いたもの、二枚の切った紙を編み込んだもの、楽譜など柄のあるものを背景にして背景も含めて作品とする貼り絵、一枚から立体的に組み立てた切り絵なども残されている。それらの作品はアンデルセン博物館に収容されている¹²。

次にスイスの切り絵について、スイスもまた切り絵の発祥は中国の剪紙から来ているとする説がある。スイスの切り絵は主にアルプスでの景色や詩情などを表現しており、デクパージュ¹³の技法などが使われている。17世紀以降、ペイダンオー地方を中心に今尚受け継がれている伝統工芸である。具体的には、牛たちを山上の牧草地につれていく「牧のぼり」、山をおりてくる「牧くだり」などアルプスに生きる牧童たちの伝統や山の木造小屋（シャレー）や森、動物たちなどアルプスの牧歌的な情景をモチーフとして

¹⁰参考：VIVA MEXICO by たきれいな (2017/10/27)

URL：<https://allartesaniamexico.com/papel-picado/>

¹¹URL：www.facebook.com/EmbassyDenmark/posts/1243290079040846/

2017年4月4日 投稿【アンデルセンは、実は天才的な「切絵」作家だった！】

¹²参考：デンマーク大使館公式Facebook URL：注釈11参照

¹³切り抜き細工。紙の切り抜きを板などに貼り付け、仕上げにワニス(樹脂を溶剤に溶かした塗料。ニス。)を塗る技法。またはその作品。生活調度品の装飾のために17世紀フランスで始まった。

左右対称にデザインされたものが主流でとなっており、これはスイス切り絵の特徴のひとつだと言える。作る工程のポイントとして、黒または白い紙に鉛筆で下書きし、小さなカッターやハサミを使って、レースのような細かい模様をつくりあげていく。前述した通り、蒼山日菜はこの国の切り絵から影響を受けているため、彼女の作品はスイスの切り絵の特徴と重なる。ハサミで白あるいは黒の紙を切り、その表現は細かいレース状のものである。ただ、彼女の作品は風景や詩情を表現したものとは異なり、彼女の世界観が映し出されたオリジナリティ溢れるものである。一方のスイスだが、切り絵工芸の歴史は中世の時代からで、ペイダンオー地方で多くの作品を生み出した芸術家たちが登場したことで広がり、人気を博したのが19世紀初頭である。現在ではスイスの切り絵細工の伝統を守り、次世代に伝えていくために『スイス切り絵協会』が設立されている。そしてその切り絵協会に所属する切り絵アーティストは全国で約1000人にもものぼる¹⁴。

最後に取り上げたいのはポーランドの切り絵「ヴィチナンキ」である。その歴史は18世紀にさかのぼる。ポーランドの切り絵は中国の剪紙に由来しておらず、生活の知恵から生み出されたとされている。当時、農家では、窓にカーテンの代わりとして、防寒効果にも優れた羊の皮を使用していた。そこから幾ばくかの明かりを得るためにその羊の皮を切り取ったのが、ポーランドの切り絵の始まりではないかといわれている。この説が有力とされる所以として、現在も細かく繊細なモチーフの切り絵は全て、直径15cm-20cmほどの大きな羊毛バサミで切り取られているということが挙げられる。後に羊の皮ではなく紙を切り抜いて窓の装飾を施すように変化していった。また、19世紀前半になり色紙が庶民の間にも出回るようになると材料が容易く手に入り、安価にカラフルな切り絵が作られるようになる。メキシコでカラフルなパペルピカドがつくられるようになったのは1900年代中期であり、ほぼ同時期にカラフルな紙が手に入り易くなり、使用されるようになったことが伺える。ポーランドの切り絵はワルシャワ近郊の農家の女性達の間で部屋の飾り付けとして盛んにつくられるようになる。切り絵は冬の時期に家庭内で楽しめる娯楽としても広がっていった。中国の剪紙の作り手も農家婦女であり、いずれも農作業の行えない時期にそれらは盛んに作られた。このように中国の剪紙やメキシコのパペルピカド誕生の背景と共通点の多かったポーランドの切り絵であるが、それらとの大きな違いは完成品の形態の変化である。勿論、現在でも窓の装飾としての切り絵は作られているが、その他に様々な色の切った紙を貼り合わせていく貼り絵と融合した切り絵の文化も発足したのだ。色紙が容易く手に入るようになったことか

¹⁴日本・スイス国交樹立150周年記念 スイス伝統の切り絵の世界を紹介する特別展開催
URL : <http://www1.myswiss.jp/d/news/news.php?id=1798>

ら新たな切り絵の手法を確立させ、ポーランドの切り絵は村の女性達の間で親から子へと脈々と伝えられる伝統文化となった¹⁵。

第二章 目的の異なる切り絵

(1) 手段として用いられる切り絵

第一章(2)で触れたように、伊勢型紙は本来、型染めのための道具であって型紙本体が作品や商品としての価値を持っていたというわけではない。伊勢型紙を生産する三重県白子市に赴き、「テラコヤ伊勢型紙」を経営する現役の職人、木村淳史氏に取材したところ、職人の考えとしても伊勢型紙は反物を装飾するために染める道具の一つでしかないということであった。しかし、伊勢型紙の項で記した通り、時代の流れとともにその様相は変化していく。衣服の変化やプリント技術の発達から型紙としての生産の需要が低下し、産業が廃れ始め、伝統工芸品（用具）である伊勢型紙を途絶えさせないために新たな展開を試みた。その結果、染め物のための型紙としてだけではなく、その作られた型紙本体にスポットを当て、伊勢型紙の商品、作品が市場に出回るようになった。

このように伊勢型紙に関しては時代の流れによって、生産の手段として作られることに加え、本体が主体となる作品としてもつくられるようになり、展開の幅を広げた。

勿論、時代の流れによる変化に関わらず最初から何かを完成させる目的の元、手段として使用されていた切り絵は存在する。ドイツ出身のロッテ・ライニガーは世界初の長編アニメーション『アクメッド王子の冒険』を手がけた影絵アニメーション作家である。松澤淳著『ロッテ・ライニガーと彼女の時代—影絵アニメーションの魅力について—』によると、彼女は誰に教わるでもなく、ハサミを用いて人や動物の形をシルエットで切り出し、12歳の頃にはオリジナルの影絵劇を創作していたという。彼女の手がけたアニメーションの制作過程についても触れられており、以下はその抜粋である。

引用：『まずは、ライニガーが、厚紙からハサミを使ってシルエットを作る。動かしたい部分はパーツに分け、それぞれのパーツに穴をあけ針金でつなぎ合わせる。仕上がったシルエットは撮影のためにアニメーションスタンド（線画台）に置かれる。撮影指揮を執ったコッホが考察したアニメーションスタンドは、テーブルをくり抜いた後、その部分に透明のガラスを置き、ガラスの下方にライトを、上方にカメラを備え付けるものであった。ライトに照らされ、ガラスの上で影絵となった厚紙からできた人形を、少

¹⁵SLOW ART BLOG ポーランド切り絵の世界

URL: http://slow-art.blogspot.com/2010/06/blog-post_21.html#.Xn9ykRQ2sy4

しずつ動かし、撮影していく。カメラが固定されていたため、場面全体を動かしたい場合は、テーブルを左右にスライドさせた。ズームアップや、ズームバックの効果を生み出すために、カメラのピントを変えるのではなく、その大きさに合わせた大小のシルエットがライニガーによって別途作成され利用された。また、遠近感を出すために、色を濃く出したい背景の部分には、ガラスの上に半透明の複数枚のパラフィン紙を重ねていた。パラフィン紙の枚数によって、濃淡のグラデーションが生まれていく。さらに、ガラスのひかれた台は複数層になっており、カメラの焦点が合っている上層に輪郭のはっきりと映したい対象を、下層にはぼかして撮影したい対象物をおいていった。工夫を凝らした撮影方法によって、平面上に奥行きが与えられていく。』(引用ここまで)

ライニガーの切った紙のシルエットを利用し、光を当てることでできる影を映像に使った。映し出されたシルエットは紙を切ってつくられたものであり、切り絵、切り紙と呼ばれるものであるが、この切られた紙本体は完成した作品の主体ではない。作品はあくまでも「映画」なのだ。この場合、映画を制作する上で必要な影を映し出すための道具として切り絵が使われているため、これは手段としての切り絵であると言える。

切り絵を用いて作られたものという視点から、「もちもちの木」という絵本作品も取り上げられる。「もちもちの木」¹⁶に描かれる絵は切り絵で作られたもので、絵の輪郭、繋がり合う線やその線同士の関係性などからは、切り絵に見られる独特な特徴がよく現れている。これは絵本を描くという行為に切り絵の技法が採用されたというものだ。もし本当に切り絵本体を利用した切り絵の絵本となれば、1ページずつが切り抜かれたものとなるはずだ。

このように、これまでに挙げた作品は全て切り絵の作品ではなく何かの目的を達成するため、一手段、一表現として、技法が採用された切り絵なのである。

(2) 作品としてつくられる切り絵

技法が採用されたものではない、作品として切り絵本体の価値が見出されたものはどういうものか。作品としての切り絵に焦点を当てれば、先に触れたような諸外国の文化のなかで作られた切り絵の大半はこれに当てはまっていると考えられる。中国、メキシコ、ポーランドは装飾として切り絵本体をそのまま飾りに使用している。スイスの切り絵は風景や詩情を表現しているが、それをとりわけ映像にしているわけでも印刷して絵本にしているわけでも何かを描くための型紙としているわけでもない。デンマークのア

¹⁶滝平二郎作の絵本。1971年、岩崎書店発行。滝平二郎：1921年4月1日生まれ。茨城県新治郡玉里村(現、小美玉市)出身の版画家・切り絵作家。日本美術会委員、日本児童出版美術家連盟会員、日本きりえ協会代表委員。代表作には「もちもちの木」「花さき山」などがある。

ンデルセンは童話とともに切り絵をつくって人々を喜ばせていたが、その切られた作品もそれ単体として残されている。これらは文化という位置づけでその手法や文脈が人から人へと繋げられている。ただし、アンデルセンは個人作家であるが、世界的に愛されている童話作家である彼の作品は人から人へと語り継がれ、日本でも彼に因んだコンクールなどが開催されており、文化的側面を有していると捉えられる。

そして現在、文化ではない個人作家による切り絵作品が多数世の中に存在している。本稿において既に何度か登場している蒼山日菜はやはり日本における昨今の切り絵ブームの火付け役となった人物と考えられる。彼女は2000年から切り絵の制作を始め、2004年頃から作品の出展や個展をするようになり、2009年頃から日本のメディアに取り上げられ始め、2018年まで多くのテレビ出演を果たした。出演したテレビで代表的なものには、フジテレビ2009年6月18日「奇跡体験！アンビリバボー」、日本テレビ2011年6月13日「スッキリ」などがある。¹⁷まだまだ世間での切り絵の知名度は低いが、彼女がこれらの視聴率の高い番組に多く出演したことで、放送される以前よりも切り絵というジャンルは広く知られるようになったと言える。その根拠として、切り絵という言葉から何のイメージも湧かないという人が多い中、切り絵を知っているという人が挙げる切り絵の例は彼女の作品を指していることが多いのだ。

現在は、この時メディアで紹介されていたことをきっかけに切り絵を始めた人、当時から切り絵作品の制作活動をしていた人など、多くの切り絵作家が活躍している。そしてその作家たちの一部の作品を収蔵しているのが、山梨県富士川クラフトパーク内にある切り絵の森美術館¹⁸という施設だ。この施設は2010年3月に設立された、切り絵作品のみを収蔵した美術館である。この美術館における切り絵の定義は「紙などを刃物(鋏やナイフ等)でカットし、貼ったもの。カットによって生まれる美しい切り口(線や断面)を活かし絵を描くこと」とされており、館内にはその定義に則った作品が収蔵されている。また、国際切り絵コンクールにおける入賞・入選作品も多数展示されており、ここに展示される作品は全て切り絵本体に価値を見出し作品として切り絵を扱っているものである。

¹⁷その他、テレビ東京2011年6月26日「ソロモン流」、テレビ朝日2011年7月21日、2012年3月29日「モーニングバード」など人気の高いバラエティー番組や朝のニュースが挙げられる。また、平均視聴率を調べられたものでは日本テレビ2012年8月5日「行列のできる法律相談所 夏の2時間スペシャル」(平均視聴率14.1%) (ブログサイトJUGEM 紫苑淋)、テレビ朝日2017年3月29日「マツコ&有吉の怒り新党」(平均視聴率11.0%) (スポニチアネックス ビデオリサーチ調べ関東地区) などにも出演。

価格.com テレビ紹介情報 URL : kakaku.com/tv/search/keyword=蒼山日菜/

¹⁸山梨県南巨摩郡見延町下山 1597 番地 0556-62-5545

第三章 多角的な視点から見る作品としての切り絵の特徴

(1)平面と立体の切り絵

作品としてつくられる切り絵には平面のものも立体のものも存在する。平面作品について、諸外国の文化の中でつくられてきた切り絵はほとんどが平面のものであった。ただ、メキシコのパペルピカドに関しては、一枚そのものを見れば平面作品であるが、何枚もの切り絵が連なった状態、無数の切り絵により空間が彩られる状態を一個体と見るのであればそれは空間、つまり三次元との関わりが生まれるため立体という捉え方もできる。また、アンデルセンの作品は多くが平面作品であるが立体作品も残しており、彼の作品は平面作品と一括りにはできないことにも注意しなければならない。

文化ではなく個人作家による平面の切り絵作品について、まず先ほど記した蒼山日菜の作品を例に取り上げると、彼女の作品は白い紙にデザインを印刷し、黒い印刷部分に沿ってハサミで切るという手法で一枚の平面切り絵作品がつけられている。そのデザインはオリジナルのもので、レース状の柄を蝶々やおとぎ話の登場人物の衣装などに充てるなどして独自の世界観を展開している。作られる作品は糸のような細さで非常に細かく繊細であり、オフィシャルサイトのプロフィールにもレース切り絵アーティストとして紹介されている。彼女の作品はオリジナルの世界観を切り抜いたもので、切り抜いた後に折る、組み立てるという作業のない平面の切り絵作品として完結している。

切り絵の技法を使った絵本「もちもちの木」の著者、滝平二郎は絵本作家であると同時に切り絵作家でもあり、遺された作品は絵本だけには留まらない。その絵本のベースとなっている切り絵作品も多数ある。滝平二郎の作品はカラーが入っている平面の切り絵だ。庶民の暮らしや昔の農村風景をテーマに、輪郭線は黒い紙を切ったものでつくられ、その輪郭の中に必要に応じて着色が施されている。レース状の切り絵に見られる細かさと比べると大胆な表現が多い。しかし、大胆なところと細かいところでメリハリが生じ、人物と草木で変わる表現のコントラストが際立って見える。

このように独自の世界観やテーマに基づいたオリジナルの作品のほか、風景をそのまま切り絵にした切り絵作品もある。青森県には、定期的に講師を招いて教わりながら切り絵に親しむ「青い森切り絵の会」という切り絵同好会があり、会員たちは主に写真をもとにした切り絵の制作をおこなっている。紙が切り離れないような工夫をして再構築

した風景ないしモチーフが図案に採用されているのだ。青森市で行われていた展示会にて展示されていた作品はどれも額装された平面作品のものであった。

以上のことをまとめ、背景となる台紙に貼り付けて一枚の絵を完成させているもの、額装されているもの、というのが平面の切り絵作品によく見られる特徴であると考えられる。一枚からつくられていたものであっても、「折る・組み立てる」などの工程を経るもの、紙本体の厚みに作品の表現が干渉するもの、空間との関係性が優位性をもつ空間デザインになるものは平面性を損なっているとして平面の切り絵ではないと言える。

では平面ではない、つまり立体となっている切り絵作品にはどのようなものがあるか。立体の切り絵作品をつくる作家について、それぞれに独特の特徴がある濱直史、ともだあやの、SouMa の三人の立体切り絵について触れていきたい。

まず濱直史について、彼は立体切り絵というジャンルの第一人者である。立体切り絵という単語が上がる際に彼の作品である「鶴の立体切り絵」がその例にしばしば挙げられる。彼のつくり出した、切り絵が施されたことで透かし部分のある折り鶴が、世間の人にとって最初に浮かぶ立体切り絵となっている。蒼山日菜と同様、彼もまた多くのテレビ番組に出演しており、その知名度を上げてきた。2013年から彼自身の地元のローカル番組に出演するようになり、その後フジテレビ 2014年8月27日「めざましテレビ」、日本テレビ 2014年3月11日「スッキリ」など2年ほどで数多くの視聴率の高い番組に出演した。2017年には二度目の「ヒルナンデス」出演を果たし、同年10月15日、日本テレビ「シューイチ」にも出演している。¹⁹2019年現在も本の出版や個展開催などの活動は引き続き行われている。

彼の代表作とも言える立体切り絵の折り鶴は、ただ折り紙に切り絵を施し、折り鶴を作る要領で紙を折って作ったものではない。完成形から必要な部分を逆算し、簡略化した土台の必要な箇所だけに切り絵を施し、要らない部分を徹底的に削った無駄のないデザインから作り上げられている。制作手法に関して、切り絵の図案はデザインナイフを使用し切り抜いていく。全体のシルエットは必要に応じてステンレス製の定規をあてながらカッターで切り、その定規やピンセットなどを使いながら細かい箇所も丁寧に折り曲げ立体にしていく。また、折り鶴の羽などカーブさせる箇所は薄い紙で挟み、手でその形を形成する。折り鶴以外の作品も多数あり、作品によっては二枚以上の紙を使用し

¹⁹その他、2014年6月23日「世界1のSHOWタイム」また、同年に「行列のできる法律相談所」、日本テレビ 2015年8月17日「ヒルナンデス」、TBS系列 2015年10月5日「Nスタ」、同年にテレビ東京「L4YOU!プラス」などにも出演。

価格.com テレビ紹介情報 URL : kakaku.com/tv/search/keyword=濱直史/

濱直史氏の Facebook アカウント URL : ja-jp.facebook.com/naofumi.hama.3

色や柄を重ねているものもあるがここでは折り鶴を彼の立体切り絵の代表作として挙げる。

次にともだあやのについて、彼女は女子美術大学に在籍していたが、切り絵の習得はほぼ独学であった。Twitter やブログなどで自身の作品の発信や個展の開催、グループ展出品など多くの場でその活躍を見せている。2018年に日本テレビ「NEWS24」にて制作現場取材の様子が放送された。²⁰

彼女のつくる立体切り絵は、先に紹介した濱直史の折り鶴の立体切り絵とはまた異なった手法でつくられる。前述した折り鶴のように一枚の紙から切り出したものを組み立てるのではなく、切り出した数枚のパーツを貼り合わせることで立体作品を形成しているのだ。彼女の作品の多くは、一枚一枚の紙が作品の「表面」にあたる部分を担っているため全てのパーツが揃って初めて形の完成が見られる。パーツは細かい総柄のようなもので、色の違うものを貼り合わせても自然に馴染む。この総柄の、いくつかの紙を貼り合わせてつくる立体切り絵は彼女独特の手法である。

最後に SouMa について、彼女は立体切り絵作家という位置づけだが、一枚の紙からつくられたとは思えない繊細かつ立体的なその技巧から「切り絵」の概念を超えたものとして注目されている。切った紙をさらに折って組み立てる、切った紙の細い部分を糸に見立て縫い付けるなど、これまでの切り絵作品に見られなかった様々な手法が彼女の制作にはちりばめられている。また、羽のモチーフのある作品では立体感とリアリティーを追求し、外側から内側に向かって切ることで圧をかけて羽先が浮き上がるような工夫がされている。そしてそれらの作品のほとんどは下絵や設計図のようなものはなく、自身の感性に任せて創作しているのだという。その他、表現の一つとして火や水の使用や、紙の層を剥がして切るなど独特の手法も見せる。紙を切って絵や形を成しているが、従来の「切り絵作家」という枠組みを超越した新たな切り絵を生み出している。

このように折る、組み立てる、曲げる、貼り合わせる、縫い付けるなど、平面性を超えて立体物として形成されたものは立体切り絵と呼ばれ一般化している。

ただし、紙を使用していて奥行きを感じさせる立体作品に「彫紙」という技法があるが、これは切り絵とは違う技法であり、立体切り絵の分類には入らない。「彫紙」とは林敬三が始めた技法であり、描くモチーフの色に番号を振り、その番号通りに何枚もの色紙を重ね、彫り起こしていくという技法だ。これは紙を何枚にも重ねることで、紙で出来た一つの物体をつくり、それを彫ることで絵を形成していくものである。このよう

²⁰ オフィシャルサイト日テレ NEWS24

URL : www.news24.jp/articles/2018/06/05/07395068.html

に「彫紙」は、手法、作品ともに切り絵とは異なるため、切り絵の分野には入らない。

伊勢型紙で型紙を「彫る」と表現するのも商業目的であり、大量生産のため何枚も重ねた状態でその制作が行われることに起因する。そのため、「切る」のではなく「彫る」という表現がやはり正しい。ただ、伊勢型紙は彫ることを活かして柄や紋様を描いているのではなく、あくまで作業の効率化のために地紙を重ねており、完成品は均一に一枚で一つの型紙、切り絵状のものとなっている。故に、同じ彫る技法であっても彫紙と伊勢型紙では性質が大きく異なり、切り絵か否かが分かれる。

(2)素材別での切り絵

人の手によりつくられる切り絵は、その素材に紙が選ばれることが多い。手に入り易く、カットがし易いためだ。そのため主に紙でつくられている切り絵を例に取り上げてきたが、使われる素材は紙だけではない。

工作エンタテインメントを掲げる活動を行っている「できたくん(旧ハッポウくん)」は以前、発泡スチロールを使った即興の似顔絵切り絵をテレビ番組にて披露していた。「発明漫談家」「発明家芸人」と自称していた彼はその名称の通り、漫談をしながら一枚の発泡スチロールを糸鋸でカッティングし、芸能人の横顔の切り絵をつくるという手法でつくってみせた。

商業目的のものでは、素材に板金を採用したものがある。レーザー加工で切り抜かれたデザインを施し、髪飾りやアクセサリーのモチーフなどがつくられている。新潟県に位置する板垣金属株式会社では全く新しい切り絵のインテリアとしてオリジナルの切り絵組み立てキットを開発した。切り抜かれた絵、切り抜いた形の両方を、壁面に貼ることでワンポイントとして使えるというものだ。紙以外の手軽な素材として採用されるものには発泡スチロールが挙げられたが、板金加工がそうであったように、生産性を図りレーザーやレーザー彫刻機、ウォータージェットなど、特殊な機械や技術を用いて「切る」「切り抜く」という行為が可能であれば切り絵にできる素材は限りなく存在する。

(3) 道具別に見る手法の特徴

ハサミで切る人もいればデザインナイフで切る人など、制作者によって使われる道具は様々だ。制作者側の使い易さや慣れに則していることのほか、その手法に最も適しているという点で採用される道具もある。

折った紙を切り開きシンメトリーの切り絵をつくる場合、折り目になっている箇所からハサミを入れていくため、使われるハサミは一般家庭にあるもので十分だ。しかし、レースのような切り絵をつくる蒼山日菜の作品は同じようなハサミではつくることが出来ない。この切り絵では先端が尖っている刃の細い切り絵専用のハサミが使用される。代用品として手芸用のハサミを使用することも可能とされている。このレースのような切り絵は折って切るものではないため、側面から大胆にハサミを入れることができない。内側の柄を切り抜く際、ハサミの先端で紙に小さな穴を開け、そこを起点としてハサミを入れていくのだ。先端が鋭く尖り、それに伴い刃そのものが細くつくられている必要がある。一般家庭用で使用されるハサミでは先端の尖り具合が弱く刃も太いため細かい表現が不可能なのだ。

ハサミを使用する場合、片手でハサミ、もう片方の手で紙を持つため空中で切ることになる。また、図案が細かければ細かいほどそのサイズには限界がある。両手で納まる程度、扱いきれる範囲というように制約が生じる。その点、デザインナイフを使用する場合は平なところに紙を置いた状態で刃を滑らせるように切り進めるためサイズの制限がない。図1は筆者自身が学部生4年次に制作したものだが、この大ききで約2m×3mである。場所の確保さえ出来ればさらに大きいサイズでの制作も可能だ。また、SouMaの手法を紹介した際に記したように、切る向きや圧力のコントロールにより立体感を持たせることが容易に行えるのもデザインナイフを使う利点と言える。

平なところに置いて刃を使うものでも伊勢型紙で使われるものはデザインナイフではなく彫刻刀だ。現在では、手前に向かって彫り進める縞彫り、引き彫りはデザインナイフでも応用の効く技法であり、手入れの手軽さからそちらを愛用する職人もいる。しかし、切れ味や手に馴染む刃の角度など、各職人がこだわりを持っておこなうため、彫刻刀からつくるといふ職人も数多くいる。一方、錐彫り、道具彫りは特殊な錐や彫刻刀を使用するため刃の形そのものがデザインナイフとは異なっており、それらは専用のものが用いられる。錐彫りで使われる錐の先端は半月型になっており、型地紙に垂直に突き立て回転させながら彫ることで円形の形に切り抜くことができる。現在は趣味の切り

絵が興じて伊勢型紙を彫ることに興味を持ち始めた初心者向けに、最初から刃の先端が円形になっている「丸錐」が販売されている。円の大きさの違いを利用しグラデーションの表現などもできることから専門店では円の直径最小 0.3 ミリ（00 号）から最大 6 ミリ（30 号）まで取り揃えられている。道具彫りは刃の先端がもともと切り抜く形の形状をしており、花びら、扇、菱形など様々な形がひと突きで切り抜かれるように出来ている道具である。伊勢型紙で使われるこの 4 つの技法はそれぞれが高度な技術を要し、一人の職人に対し一つ技法が基本だ。そして当時からその技法に合わせそれぞれ適したものが使われてきている。

また、商業目的で効率良く強度のあるものを大量生産する場合においてはレーザーカッターやウォータージェットなどが使われる。これらの特殊な機械は他の刃では切れないものを切ることが出来るという利点がある反面、レーザーの場合には燃える素材を切った際に切れ味に焦げ目が残るなど、必要としない遺物が出来てしまう可能性も孕んでいる。



図1 筆者制作「対峙」
弘前市立百石町展示館にて、2017年6月9日～6月12日開催
弘前工芸協会展『MITAINA～みたいな！』出品

(4)紙の場合の使用する枚数について

基本的には一枚の紙から切り出した作品が多い切り絵であるが、複数枚から構成される作品もある。立体作品の表現の一つとしてや、色を取り入れるもの、配置に奥行きをもたせるものなどにその特徴は見られる。

まず、立体作品で紙を複数枚使用する場合について、本章(1)で紹介したともだあやの
がその手法を取り入れている。彼女の作品は切り絵でいくつかのパーツをつくり、それ
らを曲げる、貼り合わせるなどして構成されている。パーツを組み合わせていくことで
切り絵でありながら彫刻のような立体造形を作り上げることに成功している。

次に色を取り入れたものについて、輪郭線を残した切り絵の裏からカラーのある和紙
や画用紙、アクリルフィルムなどを貼り合わせ、スタンドグラス²¹のような仕上がり
にする切り絵がある。黒い切り絵をベースに違う紙を合わせ、使用枚数は複数になること
からこの項目にカテゴライズした。このようにカラー違いのものを合わせる手法には、
もとの切り絵と同じ手法で切った色のある素材を配置することでつくられる切り絵と、
輪郭線通りに切った色のある素材を貼り合わせてつくるスタンドグラス状のもの
の二つが存在する。

奥行きをもたせることで複数枚の紙を使用する作品については今回の筆者自身の作
品にて紹介したい。それぞれ別に切り絵を用意し、手前から順に奥へと配置していくと
いうかたちで紙を複数枚使用する。この奥行きを利用することでシャドーボックスに見
られるような空間の広がりもつくるのが可能になる。

しかし、シャドーボックスは本稿の切り絵の定義からは外れるため、ここでは除外し
る。

²¹表面に顔料を焼きつける、色板ガラスの細片を接合するなどの方法で色模様を構成した板状ガ
ラス。主として窓に用いられる。

第四章 アンケート調査と切り絵作品の制作について

(1)年代別での認知度を図るアンケート調査

10代後半～20代、30代、40代以降と年代で分けたとき、認知やイメージの偏りの有無を知るため、弘前大学生、弘前市在住の市民に向けてアンケート調査をおこなった。まず10代後半～20代の弘前大学生から回収できたアンケートは200名分あり、そもそも切り絵を知らないと回答した人（以下、A）は61名(30.5%)と、約3割に登った。切り絵を知っていると回答した人のうち、美術に興味がある上で切り絵を知っていると回答した人（以下、B）は85名(42.5%)、美術に興味はないが切り絵を知っていると回答した人（以下、C）は54名(27%)であった。何で切り絵を知ったのかという問いについて、最も多かった回答は「小・中学校での授業、大学の講義」であり、その数は47名(23.5%)であった。これに次いで多かった回答は「テレビ」であり、その数は40名(20%)と、授業で切り絵を知ったと回答した人とほぼ並ぶ結果となった。また、この世代はほぼ100%の割合でTwitter、LINE、Facebook、InstagramなどのSNSを使用している。それらのSNSを一切使用していないと回答していた人は5名にも満たない。そのため、切り絵を知ったきっかけにもこれらも関与しているのではないかと予想を立てており、実際にネットサーフィンやTwitterと回答した人は15名(7.5%)とわずかながら存在した。その他、ちぎり絵・貼り絵を切り絵と捉えている回答が2名分あった。ちぎり絵・貼り絵は冒頭に記した本稿における切り絵の定義からは外れている。しかし、それらを切り絵と認識していたという人は多く、以下の世代のアンケートにおいてもこの点には着目していく。

次に30代の結果について、回収できたアンケートは113名分であり、うちAは47名(41.5%)、Bは24名(21.2%)、Cは13名(11.5%)という結果になり、残り29名(25.6%)はちぎり絵・貼り絵を切り絵と捉えていた。知ったきっかけについては、本稿の定義に該当する切り絵を挙げた人はテレビで知った人が多く、書店、展示で知ったという人が若干名いたという結果になった。

そして40代以降の結果について、回収できたアンケートは138名分、うちAは53名(38.4%)、Bは13名(9.4%)、Cは34名(24.6%)となっており、ちぎり絵・貼り絵と捉えている人は38名(27.5%)となった。

30代、40代以降でポイントとして、テレビで知ったと回答した人がイメージしていたもののキーワードにはハサミで切ったもの、細かい作品、蝶のようなもの、などが挙げられた。これらはどれも蒼山日菜の作品の特徴に該当している。その他、何で切り絵を知ったのかという問いに書店、展示という回答もいくつか見受けられた。書店で知ったと回答した人は、書店にて切り絵の指南書、図案書などが表紙を上にするようにディスプレイされているのを見たとのことであった。これらのメディアで切り絵を知った人の中には立体の切り絵を挙げた人も数名いた。立体切り絵について知る人は必ず例に折り鶴を挙げており、濱直史の作品を指していることが伺えた。藤城清治²²を挙げた人、折った折り紙を切るタイプの切り絵を挙げた人も数名おり、それぞれ全体の約一割ほどであった。また、世代が上がるとともに切り絵をちぎり絵・貼り絵と認識している人の割合が増えており、キーワードには山下清が挙げられた。山下清の作品には確かに切り絵作品もいくつか存在するが、代表的なものはちぎり絵、貼り絵である。そして山下清を例に挙げた人もまた紙を貼るようなジェスチャーや、「細かく切って貼る物」と表現していたことからやはりちぎり絵、貼り絵を連想していたことは確かである。

10代後半～20代の層では山下清の名前は挙がっておらず、30代以降の人にとって紙を切るというキーワードのもと代表的な作家は山下清であったということがアンケート結果から判明した。

以上の結果から、切り絵を知らないという人は世代問わず約3～4割ほどであるということ、10代後半～20代の世代は授業あるいはテレビにて切り絵を認知したということ、30代、40代以降の切り絵の認知のきっかけは大半がテレビであり、その他ちぎり絵・貼り絵と認識している人が四分の一の割合にいるということが明らかとなった。

世代間での認知の差異が目立つのはちぎり絵・貼り絵と認識している人の割合という点であり、テレビから得た情報、授業で取り上げられる内容が凡そ一致していることから他の点での差異はあまり見られなかった。切り絵ということであれば、どの世代も多くの人がハサミで切るレース状の切り絵を想像し、その他折り紙でつくる切り絵や藤城清治、滝平二郎を連想する人が数名、その割合はどの世代も同程度であった。

²²1924年4月17日生まれ。東京都出身の影絵作家。カミソリと数百枚のカラーフィルターを使用し、幅広いテーマで独自の世界を影絵によって制作。絵本の代表作には『銀河鉄道の夜』『天の笛』などがある。2013年には『藤城清治美術館那須高原』が開館した。

(2)認識されていない切り絵とその制作

前章で示した通り、世代間での認知の差異は大きな一点を除いて然程見られないという、予想とは異なるアンケート結果を得ることができた。ここで新たに判明したこととして、アンケート結果のいずれにも規格の大きい切り絵に関しての認知は得られなかった。ハサミで切る切り絵とデザインナイフやカッターなどの刃物で切る切り絵との最大の違いはつくることの出来る作品の大きさにあると考えている。そしてその根拠は道具の使い方にある。ハサミで何かを切る際には、片方の手で切るものを持ち、もう片方の手でハサミを持ち、切るものの方を動かすのが基本的な使用方法となっている。つまり、片手で持つことが出来、さらに片手で扱い切れるサイズがハサミで制作の出来る最大のサイズとなる。一方でデザインナイフやカッターを使用する場合、その方法は切るものを平坦な所に置き、ずれないように切るものを押さえつけながら刃を滑らせて切るのが基本的な使用方法である。ハサミと違い片手で切るものを持ち上げる必要もなく、切るものの下に刃が入る空間をつくる必要もない。つまり、場所の確保が出来ればどれだけの大きさであっても切り絵にすることが可能なのだ。

同じデザインナイフやカッターの使用であったとしても、アンケート結果にあったような手狭に行える規模の切り絵と規模の大きい切り絵とでは扱い方や留意点が異なる。そのため、全く別の手法としてデザインナイフやカッターの強みを活かし、ハサミでは出来ない規模の切り絵の制作を行うことで切り絵に対するイメージの幅を広げたい。

今回おこなった制作では模造紙サイズのタント紙を四枚用意し、耐水性の多用途ボンドで繋ぎ合わせ一枚の大きな紙にするところから始めている(図2)。以前の作品では黒のラシャ紙をロールで購入し、約3m分を二枚切り出して上下に貼り合わせることで一枚の紙としていた。貼り合わせには幅のあるセロファンテープを使用した。紙が重ならず且つ隙間ができないように慎重に貼り合わせたが、紙の重量に耐えきれず時間とともにセロファンテープからずり落ち、長期に渡って状態を保つことは困難であった(図3)。そこで今回使用したのが耐水性の多用途ボンドである。

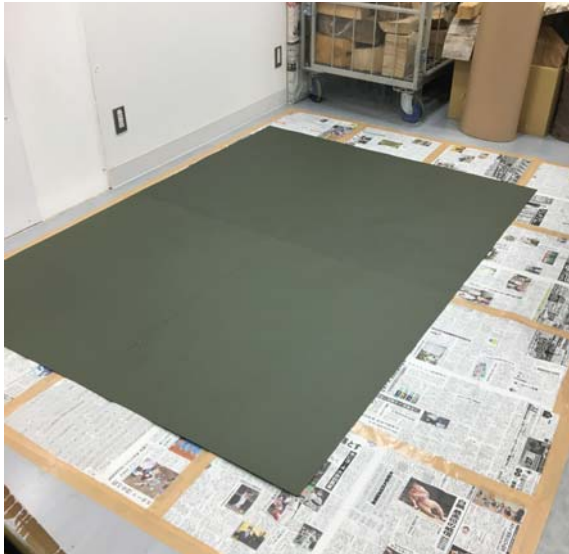


図2 模造紙サイズのタント紙の貼り合わせ



図3 経年劣化してしまった図1の作品

この多用途ボンドは水性ではないため、紙がふやけることもなく強力な接着力で形状の維持が保たれた。貼り合わせる際にのりしろをつくるため、重なる部分が出来てしまい、その厚みのある箇所が切りにくいというところに難点はあるものの、前回とは使用した紙の素材も異なっており、大きな壁とはならなかった。

使用している紙の素材が違うことについて、前回使用した厚みのある画用紙であるラシャ紙はその厚みの分、紙の層が多かった。紙の層が多いデメリットとして、切る力が弱いと、この層の一部しか切り取ることが出来ず、断面にぼそぼそとした紙の繊維が出てきてしまう、という点が挙げられる。切ることは不可能ではなく、厚みがあるということは強度があるということでもあるためメリットも勿論あるが、消費される労力が大きく完成品の見栄えが悪くなってしまいうというリスクを孕んでいた。

そのため、今回は90キロのタント紙²³を採用した。厚さは大体0.09～0.13ミリであり、一般的な折り込みチラシよりも少し厚みがある。前回使用した紙よりも層が少なく、

その分弱い力で切ることができ、繊維が残ることも少なく抑えられた。難点として強度

²³規定の寸法に仕上げられた紙1,000枚を一連とし、紙の厚みの目安はこの連量(単位 kg)によって示される。

は下がるため、仕上げにラッカースプレー²⁴を吹くことで補強をおこなった。カラーバリエーションの中に「ツヤ消しクリヤ」があり、これを使用することによって視覚的な影響を与えることなく強度のみを高めることができる。3回以上吹き付けることで十分な強度を得ることができた。

使用した道具は曲線切り用の回転式デザインナイフと伊勢型紙に用いられる丸錐4号、8号、12号、16号の五本だ。回転式デザインナイフ(図4)は角度のある先端の軸が360度回転するようにできているため、一般的なデザインナイフよりも素早く滑らかな曲線をきる事が出来る。伊勢型紙の丸錐(図5)は三重県鈴鹿市にある専門店「おおすぎ」から購入したもので、直径0.3ミリの00号から直径6.0ミリの30号まである。今回使用しているのはそのうちの4本だ。正確な円を切り抜くことができるが、接地面と錐が垂直の状態を保ち、力加減にも注意しなければすぐに刃こぼれしてしまう。しかし、回転式デザインナイフでも難しい小さな円(図6)を正確に切り抜くためには必要不可欠な道具となっている。



図4 曲線切り用の回転式デザインナイフ

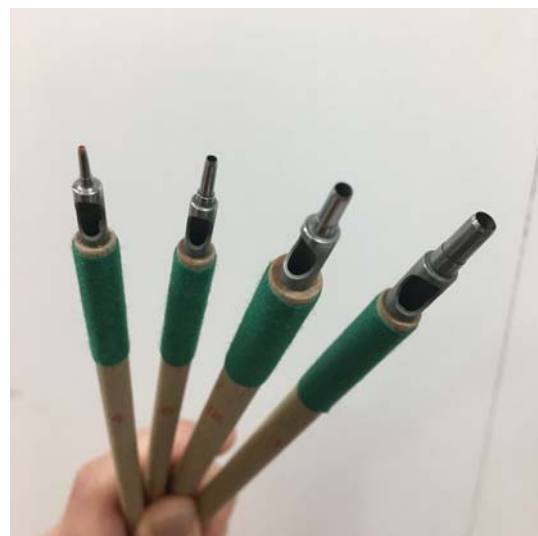


図5 丸錐 左から4号8号12号16号

²⁴塗料の一種。溶剤を揮発させることにより、乾燥すると硬く耐久性の高い塗面に仕上げられる。



図6 デザインナイフでは難しい正確な極小の円の切り抜き

展示方法について、切り絵の展示は額装するのが一般的であるが、展示方法はそれだけではない。吊るして空間そのものに切り絵を存在させることで、その特有の透け感を楽しむことができる。吊るして展示する場合には切り抜いた穴を利用し、天蚕糸などを括り付けて天井から吊るす方法が考えられる。しかし、この規模のものであれば紙本体の重量に耐えきれずすぐに切り抜いた穴から裂けてしまう危険性がある。そこで行ったのが吊るすために使う切り口の補強である。針金を切り口の形に合わせて折り曲げ、耐水性の多用途ボンドで裏側に接着する。この耐水性のボンドを使うことにより、厚みを増してさらに強度を高めている(図7、図8)。また、吊るす展示方法を採用する際、図案にも注意しなければならない箇所がある。大胆に大きな面積を切り抜くと展示する際、重力に従って紙が歪み形状が維持出来なくなってしまう(図9、図10)。これを防ぐため、切る面積の大きな箇所は柄を描き、紙同士が支え合える状態になるように注意して図案を決める(図11)。



図7 補強用に用意した針金と形成するためのペンチ



図8 デザインに合わせて形を整えた針金



図9 例えば大きな切り抜きのデザインがあると、図10のようになる。



図 10 図9を持ち上げた際に重力によりデザインが崩れてしまう。



図11 図10のようにならないように紙同士が支えになるような細かい柄を意識したデザインにする。

そして今回の制作はテーマに四神²⁵を起用しており、四枚の作品が空間を開けながら、作品同士が重なり合うような配置で展示をした。四神をテーマにした作品は6年前に制作しており、研究していくなかで得た改善策を用いて制作している(図12)。6年前に制作した四神の切り絵は空間の中で形状を維持できないため、額の外に出すことができない。特にわかり易いところでは、図12向かって右下に描かれた白虎の表情、模様などは支えがなく、空中で不安定になる(図13)。本稿における目的を果たすと同時に、これまでの制作で生じた課題を解決しながら今回の制作に取り組んだ(図14)。

²⁵ 中国の神話、天の四方の方角を司る霊獣。東西南北の四方を守る神であり、東は青龍、西は白虎、南は朱雀、北は玄武が該当する。

制作場所の確保が出来るかどうかという問題もあり、このような規模の大きい切り絵を目にする機会はなかなかない。しかし、このように切り絵は大きい規模のものも制作が可能であり、展示方法も枠に納めない方法をとることができる。切り絵の手法を用いてつくられたパーテーションなどもあるが、それを見て切り絵だと感じる人は少ない。紙で作られているもの、両手に納まる程度の小さいもの、というのが一般的なイメージとして根付いていることが原因と考えられる。この内、後者のイメージを脱却させる一提案としてこの制作を掲げたい。



図12

6年前、四神をテーマに筆者自身が制作した切り絵



図13

赤丸で示した箇所は、青丸で示した箇所のみを支えられている。その強度のなさから赤丸で示したところが空中で不安定になってしまった。



図1 4 紙を数枚使用した、奥行きのある規格の大きい切り絵

おわりに

アンケート結果からも明らかとなったように、切り絵に関する知名度は現在あまり高いとは言えない。また、世代間での偏りは多くは感じられなかったものの、世代ごとに見た際、やはり見たことのある切り絵はハサミでレース状のものという回答が多く見受けられた。確かに、日本や諸外国の切り絵の歴史や文化を見ると、大量生産を目的とした切り絵の制作には彫刻刀が用いられるが、そうではない剪紙やアンデルセンの作品、スイスの作品で用いられた道具はハサミであった。しかし、世間一般が示した切り絵はスイスの作品に近いものばかりであり、それに使われていた道具がハサミであったためにその認識に偏ってしまったと考えられる。同じハサミを使う切り絵でも剪紙やアンデ

ルセンのつくった切り絵はレース状のものではなく、それぞれに異なった特徴を有している。このように世界でも長い歴史を持つ切り絵ではあるが、その歴史も含め、つくられている切り絵やその技法は広く知られていない。

また、立体切り絵作家として紹介してきた濱直史やともだあやの、SouMa はみな使用する道具にハサミではなくデザインナイフを選んでいる。昨今、デザインナイフを道具に選ぶ作家が多いなか、ハサミばかりが先行してイメージされるのは、切り絵がまだまだ浸透しておらず、注目の対象からも外れているためではないかと考えられる。このように大多数が切り絵に対し「ハサミで切ったもの」というイメージを抱く中、それ以外のイメージを抱く人も確実にいるため今日のような情報が混濁するという状況に至っている。第三章にてまとめた項目各々の特徴についての認知が広がることで、この問題の解決の糸口に繋がるのではないかと考える。切り絵に対する固定概念からの脱却の一助となれば幸いだ。

また、筆者自身が制作した規模の大きな作品、加えて額装しない展示方法について、これまでにそのような規模・展示方法の作品を公開した作家はいるものの、これも世間一般には知られていないことがわかった。少数派となってしまった手法や、今回筆者自身の制作したような手法の切り絵作品が世間により広く知られるためにどのような活動が出来るかあるいは行うべきなのかが今後の課題となる。ただ、切り絵というジャンルから蒼山日菜の作品を思い浮かべた人はやはり多く、濱直史の立体切り絵を思い浮かべた人も少なからずいたことからメディアの影響が大きいことは明らかとされた。現在では切り絵のみが収蔵された美術館だけでなく、写真やウェルカムボードに切り絵の採用を薦め下請けを行う事業なども発足している。このような事業なども影響のあるメディア媒体によって拡散させ、知名度を上げることでこれまで挙げてきた様々な特徴の切り絵が一般的なものとして認知されることが筆者の願いである。

謝辞

本研究に関しまして、お忙しい中ご協力いただきましたテラコヤ伊勢型紙代表木村淳史氏、株式会社大杉型紙工業代表大杉昭二氏をはじめとする社員のみなさま、ご指導いただきましたプロダクトデザイン研究室の石川善朗先生に心から厚く感謝申し上げます。

<参考文献>

- ・ 山梨県富士川クラフトパーク | Yamanashi Fujikawa Craft Park
切り絵の森美術館 (URL : www.kirienomori.jp/art_museum/49/)
- ・ 中国の切り絵「剪纸 (せんし)」-中国語スクリプト
(URL : chugokugo-script.net/chugoku-bunka/senshi.html)
- ・ 伊勢型紙専門店おおすぎ (株式会社大杉型紙工業)
(URL : www.osugi.co.jp)
- ・ 伊勢型紙協同組合オフィシャルホームページ
(URL : isektagami.or.jp/?page_id=18)
- ・ VIVA MEXICO by たきれいな (2017/10/27)
(URL : allartesia.com)
- ・ デンマーク大使館公式 Facebook
(URL : www.facebook.com/EmbassyDenmark/posts/1243290079040846/)
- ・ 日本・スイス国交樹立 150 周年記念 スイス伝統の切り絵の世界を紹介する特別展
開催 (URL : <http://www1.myswiss.jp/d/news/news.php?id=1798>)
- ・ SLOW ART BLOG ポーランド切り絵の世界
(URL : http://slow-art.blogspot.com/2010/06/blog-post_21.html#.Xn9ykRQ2sy4)
- ・ 『〈窓花〉から〈剪纸〉へ 中国・陝北農村における女性の主体化の系譜学に向けて』アジア・アフリカ言語文化研究 No.90, 2015, 丹羽朋子
- ・ 『切り絵初心者の上達を目的とする切り絵練習帳の評価』情報処理学会研究報告, 2014-GN-91(43):1-8
東孝文、金井秀明
- ・ 蒼山日菜『ディズニーレーズ切り絵 シンデレラ』KADOKAWA 2015.4
- ・ 蒼山日菜オフィシャルサイト (URL : <http://aoyamahina.com/>)
- ・ 山下清 公式サイト (URL : www.yamashita-kiyoshi.gr.jp/)
- ・ 藤城清治ホリプロオフィシャルサイト (URL : www.horipro.co.jp/fujishiroseiji/)
- ・ 濱直史『濱直史の立体切り絵』河出書房新社 2016.3
- ・ 四神(青龍・白虎・朱雀・玄武) | 神使像めぐり
(URL : [shinshizo.com/2017/07/四神\(青龍・白虎・朱雀・玄武\)/](http://shinshizo.com/2017/07/四神(青龍・白虎・朱雀・玄武)/))

<図版>

各ページに挿入

図1～図13 筆者による撮影